

# 家族造形法の深度

## 家族造形法を使った事例検討 その6

早樫 一男

### 〇はじめに…

私自身が進行役を務めている家族造形法を使った事例検討としては、定期的な研修会（ふるかわ家族カウンセリング研究所主催 月1回 京都キャンパスプラザ）と不定期な研修（女性ライフサイクル研究所）があります。

今回は、女性ライフサイクル研究所で行われた研修後に実施した、当日の参加者による座談会の様子を報告します。題して、「家族造形法の面白さと難しさ、あれこれ」です。参加者の構成はAさん、Bさん、Cさん、Dさん、今回は初めての人から数回という参加状況です。Eさん、Fさん、Gさんはここでの研修が始まった頃から参加しているベテランです。そして、私が入っています。

「家族造形法の面白さと難しさ」について、あれこれと思ったことを自由に語ってもらいました。

### 〇家族造形法の体験は…

A「クライアント役になってみると湧き上がってくる感情というものがある。頭で考えていたことと、実際にからだで感じ

ることが違うという新鮮な体験をした」

B「初めてですが、自分というスタンスから見たときに、家族がどういうふうに見えるのかということを立て的にとらえられると思った」

G「研修なんかで使う時があって、その時には、20人に一人ぐらいの割合で、さっぱりわからんという人がある。最初から、すべての人がすぐわかるというわけではないが、一方で、抵抗する人があるのも事実。こんなのは、勝手にその人が作っただけだという感じで、反発したり批判をしたりする。頭で考えるタイプの方は、なんか脅かされる感じがあるのか…。しかし、何回か体験してみると、じわーっと入っていく人もあるのだが…」

B「例えば、家族4人をどのように配置するのがすごく重要になってくるのではないか」

G「その時に、批判的な人は彫刻家役が勝手に配置しただけだというのだけれど、そんなことを言ったら、文字情報のケースレポートも主観だ。それよりも、彫刻家役（援助者）がキャッチしている情報が視覚的に置かれることで、文字情報で選んだよりかは、情報が多いかもしれない

いとも言えるが、ある種の抵抗を感じる人がある」

C「自分が彫刻として置かれて感じることはあるのですが、それが、実際の家族の人とまったく同じではないとも感じる。しかし、一方で、家族役のフィードバックをきいて、実際の家族と重ね合わせることができるのは、提出者かなあとも思う」

G「家族の実際の感じと重なるかどうかというよりも、家族造形法というツールを使って事例検討をこの場所でやったことによって、援助者が新たに見えてくるものがあるということが大きい。これまで、DVケースの事例検討等にも使っているが、実は、援助者がケース理解を深めるといった意味において、援助者自身のトレーニングの側面もあるのではないかと感じている」

C「それぞれのコメントは、可能性の一つとして受け止めるということですね。絶対視はできないということですね」

G「家族造形法を使っての事例検討をチームで実施することによって、援助者自身の理解が深まるのが大切。その場で話し合った通りにいかなくても、いろんな視点で検討したことが次にいきる」

早樫「検討するとき、これまでのペーパー中心と違うところは、立体的、視覚的であること。これは、他の検討の仕方とは決定的に違う。ただし、提出者のイメージで作っている。各メンバーからのフィードバックについては正解を求めているのではなく、どんなふうに感じますか？ということをお願いしている」

C「むしろ、言語化されたケース報告を見

るとイメージが湧かないことがある。臨床像が描かれているが、どんな人？っていうのが浮かんでこない、意味がわからないというのが結構ある。しかし、造形法という形にすると、こういう関係の中のこういう位置なのか、こういう感じのこの人ねというのがわかるから、造形法は結構いいなあと思う。理解が深まると思う」

### ○役に入る…

早樫「いつも、造形法の終わりには、それぞれ引き受けていた役を降りる、自分自身に戻るという意味で、簡単な役割解除を行っています。具体的には、それぞれ引き受けていた役割に合わせたコスチューム（衣装、上着）を脱ぐということをイメージしてもらっていますが、そのことについては…」

D「さっき、服を脱ぐという話があったが、前は服が何を意味しているかがあまりよくわからなかった。家族造形法だけでなく、クライアント像を作ることで、自分の視点も、距離を持って考えられるという経験もした。言葉によらないというのがすごいなあと思った。一番最初に身体的なイメージがきて、そこから、キャラができていく感じがした」

早樫「さきほどの抵抗にもどるが、役に入るというのは、難しく感じますか？」

G「全然感じなかった。いつも、造形に入る前のケースの簡単な紹介の際、最初はそんなこと信じられないという感じがあっても、そこに置かれると不思議とわかる、感じる。頭で考えると、なんってい

う人だ！、こんな人わからへん、信じられないと思っていても、その役として置かれるとわかるのが本当に不思議」

D「対人援助マガジンの家族造形法について読んでいて、何でこうなるのかと疑っていたが、実際に、そこに置かれたらすごく感じるなあと思うことがある。ただ、そこにいるだけなので、動きがない分、演じる必要ない分、かえっていろいろと感じるができるし、楽でもある」

G「楽だから、苦手感とか恥ずかしさが無いし、その分、じっくりと感覚に集中できる」

A「演じるというよりは、役が染み入るという感じ」

早樫「演じることを求められると、得手不得手とか苦手意識、羞恥心が生まれる」

G「造形法は、ただ置かれたままでじっとしていたらいいという教示だから、役割を引き受けたものも簡単とも言える」

A「ロールプレイだと、どれぐらい自分のキャラが役割にはいつているのかなあと考えながら進めているという感じがある。造形法はじっとしていて染み込んでくるものに集中していくということで入りやすかった」

## ○難しさ…

E「5年ぐらいになるかなあとと思うが、馴染むのに苦労した。頭で考えるタイプなので。演じないといけないと受け止めて、役に入りにくくなって。その中で、からだを感じるということを徐々に学んでいったように思う。また、ほかの人のフィードバックを聴くと、自分の感じ方の幅が

広がっていった。最初は苦も無くできたのではなくて、自分の中の感性をゆっくと育てていったという感じ。わからないという感じが最初にあったが、反発はなかった。ある時、DVの加害者役をやったことがある。やる前に頭で考えていた時は絶対に共感できないと思っていた。しかし、造形として体験してみると、誰も自分のことをわかってくれない悲しみを感じたという印象的な出来事があり、しばらく、貴重な体験として持ち続けたことがある。それから、自分の感じ方が一面的なものから多面的なものへと変わっていったような気がしている。この研修で育てられた感がある」

G「そういう意味では、造形法を体験することによって、実生活ではまったく共感できない人がわかるようになる。造形法で想像もできなかった人の役割を担ったことがあったが、やってみるとよくわかる！といった衝撃的な出来事もあった。そういう意味では、他者理解に対して、許容度が広がると言えるかもしれない。共感度が増えるといった方がよいかもしれない」

## ○家族造形法は共感のトレーニング

F「共感のトレーニングの場だった。からだから共感していくという訓練だった。そもそも、頭の人だから、最初は変に考え込んでしまって、その役割で置かれてしまった時でも、自分の感じたことで話していいか、それとも役割になった自分として話したらいいのか等、戸惑いがあった。ケースを提出した場合でも、役割

を引き受けた人は一生懸命言ってくれているのだが、好き勝手に言われているといった受け止めをしたりして、抵抗の人だったと思う。抵抗が強かった。頭で考えてしまって、みんなが好きに言っているだけという感じしかなかった」

G「好きに言ったらいい！という感じがある」

F「後になって、造形法がわかってくれば、好きにいつでももらった方がケースのためにもなるということも段々わかってきた。どこで、変わってきたのかはわからないが…」

G「そういう風に考える人は、正しい答えがあると思っているのではないか」

F「そうだと思う。ここで、ケースを出すのは、自分の感じ方や見方の幅が広がればと思っている。一つのところしか見えていなかったのが、他のところが見えたり、感じたりできることで、自分自身が広がっていけるから、面接の中でもいろんな角度から見えるようになってきた」

G「実際に、正しい答えなんかない」

F「ここで、何度かケースを出してきたが、不思議なことに、造形を通してみなさんが感じたことがあてはまることもある」

G「一人だけで想像するよりは、チームとして、みんなで広げることが非常に大きい」

F「今回提出したケースでも、提出前に感じていた父親像と提出することによって変化した父親像があり、それは、実際の面接でも変化があった。造形法による事例検討を通して、見方と感じ方が広がる。共感の幅が広がる」

## ○改めて、特徴は…

G「非常に便利なのは、忙しい援助者にとっては、準備がいらぬというのは大きい。ケースレポートをしようと思えば、記録を読み返し、文章化しないといけない。造形法は準備は不要だし、それに比べて、得るものは多い。提出者の負担がないし、みんなが参加できるし、すごく面白い。一方、これまでいろいろなところで使う中で、難しいと思うのは、女性相談、DV問題の場合、担当者が混乱することがある。女性の視点に立って、家族全体を考えるとという枠組みがあるので、造形法の場合、夫の気持ちがわかってしまったりというようなことになると、何のために、どの立場から支援するのかといった面から、混乱を感じることもある。そこで、説明するのは、全体の立場、それぞれの立場から考えてみた上で、もう一度、その女性の立場に戻って考えてみることの大事さである。とは言っても、みんなの気持ちが分かりすぎると混乱するようだ」

早樫「対人援助マガジンで紹介しているが、造形法の説明については？」

C「この研修の前に、マガジンを読んでいたので、こういうことを感じればいいのだなあというイメージはあった。特に、抵抗はなかった」

G「役に入っていて感じるということが、自分自身の固有の反応かどうかと思うことがあるだろうが、それよりも、その人自身の共感性とか感受性とかが大きいかなあと思う。援助職者で造形法を実施すると、

それなりに共感性があるのでやりやすい。それでも、個々の感度がある」

早樫「その通りで、その場がうまくいくかどうかは、役割を引き受けてくれた人の感度によるところが大きい」

G「個人的要因というよりは、その人の感性、感度は大きい」

E「講演をされていて感じるのは、うまくいく時はその場の空気をよく読んでいるとか、聴衆を引っ張るとか、空気感を読む力かなあとと思う。自分なりに、その力は付いてきたと思う。造形法の時に、役割を与えられて、置かれて、その人物にどこから入るか、進めるかというのも、その場の空気を読むということからかなあとと思う。造形法とはこういうものと教えられなかったからよかった。自分が感じるのが苦手なところも含めて、少しずつ、開いていったような感じがしている」

## ○家族造形法の持つ新たな一面

早樫「援助者にとってのトレーニングというのは改めてよくわかった。その人なりに援助者として、開かれていく、磨かれていく上でのツールとしての位置づけとすることを強く感じた」

G「感受性のトレーニングとしては、かなり効率はいいと思う。自分がこれまで理解したことのないような人について、造形法を通して理解できるのだから…」

早樫「事例検討を通しながら、援助者、参加者の感受性訓練をしているということやね」

G「それから、視点を広げるとか、いろん

な視野から家族を眺めてみることの大切さなどを体感的に味わうことができる。

個人臨床がメインであれば、家族をシステムとして見る訓練にもなる。家族を視野に入れてシステムとして考えてみると、一対一で出会っている時には見えなかったこと、感じなかったことが出てくる。また、援助者も含めた造形によって、家族にとって、援助者が及ぼしている影響も見えやすくなる」

B「そもそも支援者のためのプログラムですか？」

早樫「元々は、家族療法の相談場面で生まれ、相談家族に対して用いられた技法。特徴は視覚的、体験的、非言語的なコミュニケーションに焦点をあてている点など。私自身は、事例検討としてアレンジして使ったり、援助者自身の自己覚知のプログラムの中で、団先生とやっている」

## ○「家族造形法の面白さと難しさ」をふりかえって

急に、座談会をお願いしたにもかかわらず、みなさん、積極的に発言していただきました。

限られた時間の中で、事例検討法としての家族造形法の面白さや難しさについて、とても率直で新鮮なお話が伺うことができ、興味深い座談会となりました。

ありがとうございました。